

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-753-3013 (直通)

図書館員と語学と辞書

篠原俊夫

1. 読書、あるいは学習と辞書

趣味の推理小説を原書で読む場合でも、仕事の必要に迫られて読む図書館学関係の雑誌論文でも同じことが言えるのだが、読み進むうえで必ず出てくる問題は、速度を重んじて辞書を引くことは、なるべく最小限にとどめて、読み切ることに重点をおくべきか、読解の正確さを重んじて、律義に辞書を引くべきかということである。多分、絶対にこうあるべきだという理論はあり得ないだろうと思う。

手元にある「ペーパーバック読書学」(深野 有著 トパーズプレス発行)では、そのあたりのことを、どう考えているのか、覗いてみよう。

「辞書を引くのは時間がかかる。個人差はあるだろうが、ひとつの言葉を辞書で検索するのに2分や3分かかるだろう。1ページに意味のとれない単語が10個しかなくてともそれを全部調べていたら20分や30分はかかってしまう。えらく読書の効率をさまたげるし、1冊を7~8時間で読もうという理想達成の道にはほど遠くなる。

この辞書を引く作業を伴わないと英語を読んだ気にならない性分の人もあるだろうから辞書を引く行為そのものを否定するわけではない。ただ、一語一語の意味がわからなければ、その本を読んだことにならないという、読書行為における純粹主義に足をとられてはつまらないと思うのである。(中略)意味のとれる単語なり文脈だけで、その情景を思い浮かべるのは、難しいようではあるが、確かに初めのうちは想像力を強制されるので辛い体験かもしれないが、そのうちに慣れてくる。

その時に注意すべきは、脳裏に浮かぶ情景が『果たして作者が考えた通りのものなのだろうか?』と疑問をもたないことである。この疑問を抱き始めるともう大変である。一字一句を入念に調べなければならなくなるし、ごく当たりまえに見えるような単語でも、作者が特別な意味をこめて使っているかもしれない、と思えてくる。そういう読書は批評家なり学者の仕事であって、とても素人のよくする所ではない。(中略)

時には、うけとり方を間違えるかもしれない。でも間違えたっていいじゃないか、と割

りきる。それは、こちらの学識のなさに責任があるのではなく、つまり作者の“わからせ方”の技術がなっていないからだ、ぐらいに決めつけてしまうのだ。少なくとも、ペーパーボックスを読もうという気力をもったのだから、細かい解釈なんぞにかかずに合わないこと。その大ざっぱさが、結局は、精読につながっていくのだから・・・。」

深野はあくまで、小説を主たる対象としたペーパーボックスの読み方の極意について述べているのだから、これを持って、そっくりそのまま論文を読みこなす方法論とするわけにいかないことは、承知している。しかし、小説なら情景となるべきところを仕事の現場という風に置き換えれば、殆どそのまま図書館学の論文の読み方と考えてもさしつかえないように思う。何故なら、図書館を日常の仕事の場としている者にとっては、情景を想像するよりも、容易にそこに述べられている作者の意図を汲みとれるだろうからである。

要するに、図書館員が英語の文学書を乏しい英語力で、読みこなそうとすれば莫大な想像力を必要とするけれど、専門書を読解することに関しては、大した努力を必要としないというわけである。

そのあたりの事情を加藤周一は「頭の回転をよくする読書術」（カッパブックス 光文社）の中で、以下のように述べている。

まず、外国語を学ぶのに、いちばんよい本として、「・・・ 専門家には専門家の必要があり、一般読者には一般読者の必要があって、どうしても外国語の本を読みたいということがあります。必要のない人は外国語の本を読まないほうがよい。日本のような高い文明国には、むかしもいまも、数かぎりないよい本が日本語であります。しかし、それでも外国語の本を必要とする人は、一番必要なものからはじめるのがよろしい。外国語を習うのに一番好都合な教科書は、私たちが一番必要としている本以外にないと思います。」

（中略）そこで、英語 —— この言葉があらゆる外国語のなかで日本では一番よく知られているということも含めて —— を例にとれば、語学的に一番やさしいのは、およそ学問的に一番やさしいのは、およそ学問、技術に関する専門的な本の大部分だろうと思います。自然科学についても、経済学についても、また社会学的な研究についても同じことがいえるでしょう。もちろん、例外はあります。しかし、全体の傾向として専門用語以外の語彙の数はかぎられているし、文章の構造も簡単な場合が多いのです。」

図書館学に関する論文も、他の学術論文と同じように、一般的には単純明快な文章で書かれているものが大部分である。後は、読み手の側に読まなければならない切実な必要性があれば、読書の条件は整ったことになる。読みたいと本当に思うことができれば、後は多少の努力があれば良い。多少の努力とは、例えば、必要最小限の専門用語を憶えることである。勿論、専門用語を全て記憶してから、論文を読まなければならないと考える必要はないのだが、論文を読み進みながら、同時に専門用語を理解するためには、やはり優れた辞書と辞典が必要である。

2. どんな辞書や辞典を手元におくべきか？

経費と場所の事を考える必要がなければ、辞典も辞書も多いほど良い。しかし、多くの場合、家人に遠慮しつつ、だだでさえ狭い室内を辞書で埋めつくすことはできない相談である。取りあえず手元に置きたい辞書と辞典、私の場合ということで、考えてみる。

英語で書かれた小説や論文を読んだり翻訳したりする時、一番たよりになるのは、いうまでもなく、大型の英和辞典である。小学館ランダムハウス英和大辞典は、上下2巻に分冊されているうえに、大型なので決して扱い易いとは言えないが、頼りがいがある。なにしろ語彙が多いし、新語も豊富に収録されている。後は、岩波の大英和辞典と研究社の大英和辞典も置いておきたい。新語などは、当然のことながら、多くの辞典にあたるほど、見つかる確率は高くなる。大辞典ではないが、新しい語彙が多く収録されていて、取りあえず意味を知りたいときに頼りになる辞典が、研究社のリーダーズ英和辞典である。英和辞典をひとつとり揃えたら、英々辞典もできれば手元に置きたい。英々辞典なら、文句なしにOxford English Dictionary ということになるだろうが、残念なから、所蔵していない。その代わりというには、軽少すぎるかも知れないが、McGraw-Hill International Book Co. から出版されているThe Heritage illustrated dictionary of the English language. とRandom Houseから出版されているThe Random House College dictionary. Revised ed. を使っている。

先日、知人から英文中に使用されている記号の意味について尋ねられたとき、何を調べていいものか見当がつかず、仕方なく手元の The Heritage illustrated dictionary の symbol の項目を引いてみたら、symbols and signs として、記号の一覧表が載っていた。殆ど同じ規模の辞典だが、もうひとつの The Random House College dictionary には、掲載されていない。だから一種類の辞書を引いて、探している語彙が見つからないからと言って諦めないことである。

3. 論文を読むとき必要な用語辞典について

英和辞典や英々辞典があれば、最小限の英文読解はできる理屈である。しかし、図書館特有の専門用語を的確に理解するためには、よくできた用語辞典が必要である。いささか内容が古いが、文部省編の学術用語集 図書館学編、あるいは図書館問題研究会編で、角川書店発行の図書館用語辞典もある。八木佐吉編で丸善発行のThe bookman's glossaryも小冊子ながら、書物に関する用語を幅広く収載している点で役にたつ。

英語で書かれた用語辞典では、Harrod編のThe librarians' glossary & reference book. 6th ed. が、用語を幅広くカバーしている点でよくできた辞典である。

実際にこれらの英和、英々辞典や用語辞典さえあれば、読解は可能だろうか。欲ばれば際限がないから、これだけで英語論文に立ち向かって見よう。

机の上に3日前に届いたCollege & Research Libraries, v. 51, no. 1, Jan. 1990. がある。開いて見ると、冒頭の論文は、Resource sharing or cost shifting? - The unequal burden of cooperative cataloging and ILL in network / Charles B. Lowry. である。

この論文を図書館について、何等の知識を持たない人が辞書を片手に読みこなすのは、かなり骨の折れる仕事かも知れない。

例えば、図書館用語だけに限っても、以下のような語彙が散見される。

- ① Resource sharing ② Cooperative cataloging ③ ILL ④ OCLC ⑤ RLIN
⑥ AMIGOS ⑦ SOLINET ⑧ Shared cataloging ⑨ Original cataloging ⑩ ARL

いずれも図書館員なら、詳しいことは知らなくても、どこかで見たか聞いたかした記憶くらいはある言葉である。また辞典や辞書を調べなくても、論文そのものを注意深く読めば文中に説明されていることもある。しかし、図書館員にとっては周知の事項であることを前提に使用されていて、説明のない用語もある。上記の例についても殆ど文中には、説明がない。AMIGOS... SOLINET... う～ん、何だったけな... ということになる。

まず最近、丸善から出版された丸山昭二郎他監訳のALA図書館情報学辞典をひらいてみる。残念ながら見当たらない。次に Harrod's Librarians' glossary and reference book / comp. by Ray Prytherch. 6th ed. をひらいてみる。必要にして十分と言える説明がされている。少し長いが、AMIGOSに関する記述をそのまま引用してみる。

AMIGOS. In the American Southwest, the network of fifty-eight libraries in Texas, Arkansas, Oklahoma, New Mexico and Arizona which co-operate in such matters as on-line shared cataloguing, serials check-in and acquisition; regional catalogue card production, the generation of micro-image catalogues, user studies, on-line searching of other data bases, and facsimile reproduction transmission are other possible co-operative projects.

念のために同じGlossaryの第4版と記述されている内容に違いがあるかどうかを調べてみる。殆ど違いはないが、in such matters as 以下の文章に、using Ohio College Library Center (OCLC) system の一節がある。1977年にこの辞典が出版された時には、まだOCLCは、現在のOnline Computer Library Centerの意味には使われていなかったことが分かる。因に、Ohio College Library Center は、1967年に創設され、1973年から外部の図書館の参加が認められるようになり、さらにそれが現在のOnline Computer Library Centerのアクロニムとして使用されるようになったのが、1981年であることは、同じ第6版のOCLCの項目を引けば分かる。

用語辞典にしても辞書にしても、これひとつあれば万能と言えるものはない。もったいないような気もするが、たとえ内容は似たようなものであっても、辞典の類は版を改める度に忘れず買っておきたい。少しくらい高価でも繰り返して使用するものだから、費用あたりの効果を考えれば、かえって安い買い物ともいえる。

最後に老婆心から言うのだが、とりわけ辞書、辞典をはじめとする参考図書は、すぐ手の届く場所に置くことである。意味が分からない言葉に出くわした時、二階にある書棚をかきまわしたり、あるいは山積みの本の下から引っ張りださなければ、辞書が引けないとしたら意欲を喪失する。漱石の猫なら直ちに以下のような法則を発見するはずである。

「すべからく辞書、辞典の類は汝の読書し、思考する机上か、もしくは能う限り近く配置すべし。その利用度は距離の二乗に反比例すると知るべし」と。(終わり)

(京都大学医学図書館)